

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

崑崙山脈「阿克沙衣峰」(6770m未踏)偵察行 その11

キジル・・・トルファン、敦煌への橋渡し

キジル千仏洞へ行く途中、塩水溝という結晶した塩が地中ににじみ出ている白い谷を通っていく。周囲の山は、褶曲が見られ、このあたりにはちょっとない感じの地形である。途中何のためにやるのか理解に苦しむパスポートチェック（中国人も身分証明チェック）があり、礫漠を次第に高度を上げていく。

キジル千仏洞はムザルト河に面した断崖に洞窟を掘り、そこには装飾された壁画が残っている。キジルをも含む龜茲国は、かのクマーラジーヴァ（鳩摩羅什）ゆかりの場所でもある。入り口では、半迦思惟のポーズをとる彼の銅像が迎えてくれ、我々2人のために今夏ウルムチの学校を卒業したばかりという何さんという日本語ガイドがついて説明してくれた。まじめな青年で、一生懸命説明してくれた。ところが、まぬけなことに洞窟に入場する際、荷物はロッカーに預けろといわれ、僕も久根さんもノートもペンも一緒に預けてしまったので、全く記録をすることができなかった。もちろん壁画はしっかり目に焼き付けたけれど・・・。だから惜しいことに細かい説明はあらかた忘れてしまった。天竺から渡来した仏教文化の中継地点として、5Cから9Cにはラピスラズリの藍をはじめとして白、赤、緑の美しい壁画がこの洞窟を彩っていたという。しかし、イスラムによって征服されてからは、羊飼いの小屋として全く保存など考えられずに実用面でのみ使用されながら、幾星霜が経過。さらには19世紀から20世紀にかけての探検家たちによる壁画のはぎとり、文化大革命による偶像破壊・・・。1000年以上にも及ぶ受難の末の現在の姿である。入場したのは、6つの窟であったが、壁画の美しさ以前に痛々しさの感じられる見学であった。説明によればこの飛天は、男性も女性もいるということだったが、アフガン由来のラピスラズリの鮮やかな藍色は、トルファンのベゼルクリク、さらには敦煌の飛天へとつながる橋渡しの的なものであるということを感じさせるには十分であった。

見学を終えて帰ると、19:00。今宵のホテルは「庫車賓館」。残りの見学箇所は明日に回すことにして、夜は今宵も屋台で一杯。カシュガルでひどい目にあった「面肺子」に再挑戦。最初は、生理的に手が出なかったのだが、一口食べた久根さんが「大丈夫、この前とは違う」と一言。勇を鼓して手を出してみた。確かに前回とは趣が違っても思う。結果、今回は問題はなかった。毎日決して衛生的とはいえない屋台で一杯やっているのだから、一回くらい下痢もあって当然かもしれない。いずれにせよ、「面肺子」の名誉は復権である。衛生的といえば、屋台では麺類などを出すとき、洗わなくて済むようにという面もあるのだろうが、皿や丼にビニールの袋をかぶせてそこに食材を入れて提供していた。しかし、それが本当に衛生的かどうかは、疑問。そんなことを考えていたら、91年に初めて中国を訪ねた時、西安の屋台で、脇に置かれた汚いバケツでコショコショと皿を洗って出された拉麺が美味かったことを思い出した。まあそれに比べれば遙かに衛生的ではある。あれだけ悩まされた下痢からは、もう完全に復調したが、

実はあのあと久根さんも周さんも少し腹の調子を崩したことがあった。山にはいる直前、ヌルさんがちょっと薬を仕入れてくるといって、抗生物質と下痢止めを買ってきてくれた。曰く「中国のものを食べて起こした下痢には中国の薬が効きますよ。」と。そのことばにしたがって服用したが、確かに下痢は治まった。そして久根さんも周さんもこの薬の恩恵に与った。僕は百草が子どもの頃からの馴染みの薬なのだが、今回は迂闊にも持参しなかった。実際下痢したときは、しまったと臍をかんだが、「郷に入っては郷に従え」でヌルさんには助けられた。

クチャ市内見学

8月6日 昨日見残したクチャ市内の名所巡りの旅。最初に訪れたのは「庫車大寺」。寺とはいふものの、イスラム教のモスクである。モスクも漢族にとっては寺なのだ。今日は金曜日、礼拝の日である。午後になるとここにも今日は8000人から10000人が集まってくるのだそう。だからだろう、僕らが到着したときは、近隣から集まってきた数十人の女性が清掃をするところだった。その金曜礼拝の時はムスリムしか入れないというモスクだが、アラーの前では全ての人は同じであり、その故にアラーの家でもあるモスクには普段は誰がはいってもいいのだそう。敬虔なムスリムであるヌルさんによれば、ムスリムの条件は5つ。その1、アラーを信じること。その2、収入の40分の1を施しまわすこと。その3、メッカに巡礼に行くこと。その4、1日に5回の礼拝を行なうこと。その5、ラマダンを行なうこと。ヌルさんはテントの中にあっても、ホテルの部屋にあっても、また以前僕の家泊まった時にも、礼拝を欠かすことはなかった。このモスクは500年の歴史があるそうで、その当時の焼きレンガは貴重だということだった。礼拝所の別棟はかつての宗教裁判所のあとだったそうで、そこには刑罰に使われたムチなどが展示されていた。



町を車で流して行くと、ところどころに唐代の安西都護府のおかれた亀茲国の城壁のあとが見られる。12:00 クチャの金曜バザールを見学。庶民の生活を見るにはやはりバザールが一番だ。有名なクチャの桃や、直径50cmもあろうかと思われるナンなどを食べ歩きしながら、一通り回ってみる。「教育関係者」として興味深かったのは、バザール入り口の一番人通りの多いところにあつた一枚の看板。日本で言

えば高校にあたるクチャの中学の宣伝用の看板なのだが、成績上位者が顔写真入りで得点まで明記されていた。看板と言っても縦2mほど横は7~8mの大きなもので、顔写真は実物大である。こんなところにこんな看板。この国の秀才の賢さは折り紙付きなのはこれまでも経験してきているところだが、彼らは確実に将来が約束されているのだろう。それにしてもこんな場所にこんな形で掲示されているところに「中国」を感じた。

「大西さん、まだ『大盤鶏』は食べていなかったですね」というヌルさんの一言で昼



食は鶏が1羽まるごとはいっているという「大盤鶏」となった。鶏が姿のまま入っているのでは？という想像とは違い、骨付きのぶつ切りの鶏を1羽ジャガイモやピーマンなどと一緒に煮込んだ料理で、非常に食べやすい料理だった。「ウイグル流鶏じゃが」って感じかな。最後には麺が出てきて、それを絡めながら食べた。ウイグル料理は何を食べても美味しい。